

探求学習のスキルアップ・プログラム

今までに出会ったことのない問題が私たちを取り囲み始め、これが時代の空気を重くしていると多くの人が感じています。

我が国の少子化に例を取ってみましょう。少子化は生産人口の減少を招き、これは経済力の低下を確実に呼び寄せます。その一方で高齢化率は上昇を続けているため、社会保障制度はじりじりと破局の淵に追い詰められています。

この時代の流れの先には、過去に取ったいずれの打開策にも効果が期待できないような難問が、続々と姿を現すことは間違いありません。こうした事態を念頭に置けば、若い人々に培わなければならないのは何はさておき、未知の問題を解決する力でしょう。

ところが日本の多くの中学、高校で最も力を注いで育成しているものは、暗記力です。確かに暗記の王者は、今の日本に限定すれば大学入試や高校入試のチャンピオンとなり得ます。しかし暗記が現実の問題解決に役立つのは、遭遇する近似の問題が過去にも出現している場合です。過去に全く類例を見ない問題が山積する状況で、過去の事例を知っていることが直接的な力を発揮することはありません。

*

では問題解決力はどのようにすれば、養成することができるのでしょうか。

容易に解決法が見出せない問題場面に遭遇したことを思い浮かべてください。甚だやっかいなのは、その時何が問題なのかがはっきりしていないところではないでしょうか。しかも問題解決へのアプローチは、問題への切り込み方によって半ば決定されてしまいます。したがって遭遇場面のどこに疑問の杭を打ち込むかは、問題解決の成果に直結します。しかし日本の教育の中では問題設定者はなぜか教師と決

められています。つまり生徒の問題設定トレーニングが全く顧慮されていない、これが日本の教育を特徴付けています。したがって伝統的な授業スタイルの中では、生徒による問い立ての出番はどこにも用意されていません。

*

問題解決力を付けようと思うなら、まずは問題場面を生徒に提示し、そこから問いを立ち上げさせること、この展開を授業の中のしかるべき位置に据えることが必要です。

問いが立てられればそこから自ずと思考が始まります。思考を深めるうえで必要なテクニックは、比較、カテゴライズ、関係性を見抜き、推理などです。さらにグループのパワーを活用することで問題解決を有利に進める力を培おうとするなら、グループ学習に習熟していることが求められます。これらが探求学習におけるスタディスキルです。

以上のようなスキルは一朝一夕に身につくものではありません。本校では授業やロングホームルームの時間を使って、スタディスキルを向上させる学校生活がデザインされています。